

ブリテンにおける 「リベラル・フェミニズム」 再考

Jeremy Bentham
Mary Wollstonecraft
Anna Doyle Wheeler
William Thompson
John Stuart Mill
Harriet Martineau

報告者

- 梅垣千尋(青山学院女子短期大学)
「ウルストンクラフトのフェミニズム: 理性・徳・知識における平等」
- 板井広明(お茶の水女子大学 IGS)
「ベンサム功利主義における女性・結婚・両性の平等」
- 土方直史(中央大学・名誉教授)
「1820年代のイギリス・フェミニズムと功利主義」
- 山尾忠弘(慶應義塾大学・院)
「J.S.ミルとウィリアム・トンプソン: リベラルフェミニズム概念の批判的再検討にむけて」
- 船木恵子(武蔵大学)
「ヴィクトリア時代の経済発展とフェミニズムの理論化」

討論者

- 後藤浩子(法政大学)、小沢佳史(九州産業大学)

フェミニズムの歴史では、18世紀末から20世紀中葉までを、第一波フェミニズム、あるいはリベラル・フェミニズムと総称することが一般的であった。それは公私二元論に無反省に立脚し、男女同権、すなわち平等な法的権利の獲得を目指す運動と見なされてきた。しかしブリテンにだけ目を転じてみても、その時代の思想家が女性への法的権利付与を要求した根拠や、同時代の女性の隷従状態を批判した内実は、第二波フェミニズムが批判するような、単純な公私二元論を前提にするものではなかった。そこで本セミナーでは、18世紀末のフェミニズム草創期の思想家から、のちの女性参政権運動へと連なる、フェミニズム思想の多様な諸相を思想的な視点から丁寧に紐解き、その姿を浮き彫りにするとともに、現代におけるフェミニズム思想への貢献としたい。

2018. 10.1 (月) 13:00~17:30

お茶の水女子大学本館135(カンファレンスルーム)

入場無料、要事前申込

IGSのウェブサイトかQRコードからお申し込みください

